

書評

小林敏明『夏目漱石と西田幾多郎——共鳴する 明治の精神』岩波新書、2017年6月、i-iii、1-240頁

アスキュー・里枝

長らく夏目漱石（1867-1916）と西田幾多郎（1870-1945）にそれぞれ興味を抱いてきた。愛読する『三四郎』に出てくる野々宮宗八や広田先生には、それぞれモデルがいるが、評者は個人的に西田の姿をこの二人に重ねてきた。俗世間的で、学問的な好奇心に溢れ、服装は無頓着。これは漱石の理想の知識人の姿であろうが、瞑想にふけりながら、みすぼらしい身なりで哲学の道を歩く西田とも大いに通じるではないか。加えて、以前読んだ佐古純一郎の『夏目漱石の文学』（朝文社、1990年2月）の中の次の一節が心に引っかかっていた。

「夏目漱石のいう大我と小我、エゴは小我、セルフは大我となる。それを漱石は則天去私と言った。天というのは大我のことです。漱石はエゴを絶対化していったらどうしようもなく、全世界を手に入れても自己を失ってしまうというように、人間の運命を考えたと私は思います。哲学的に言えば独我論になるわけです。そして漱石が文学で取り組んだ問題を、漱石とほぼ同時代の西田幾多郎が日本の近代の哲学で真剣に取り組んでいくことになります」¹⁾。

このように、超俗の自由人で、思想的にも共鳴するところのある二人を鳥瞰するような研究はないかと思っていたところ、小林敏明の新著『夏目漱石と西田幾多郎——共鳴する明治の精神』が公刊された。これは、評者のみならず、漱石と西田、文学、哲学、そして日本の精神史的問題に関心のある読者にとって、まさに待望の一冊である。

小林も言うように、漱石と西田という二人の同時代人の共通性は、これまで殆ど研究されてこなかった²⁾。その原因について小林は触れていないが、たとえ共通項があっても畑違いの二人を比較するという発想が日本においてそもそも欠落していることにあるのではないだろうか。もちろん二人が文学、哲学それぞれの分野の巨人であり、二人の著作の膨大さに加えて、二人に関する研究書が膨大で困難だという現実的な問題もあるだろう。加えて、小林秀雄（1902-1983）がかつて指摘したところの、「日本語では書かれて居らず、勿論外国語でも書かれていないという奇怪な」西田の文体は、一部の論者にとって大きなハードルに違いない³⁾。西田と漱石それぞれに関する著作（『西田幾多郎の憂鬱』・『西田哲学を開く』および『憂鬱なる漱石』）をもつ小林敏明は、哲学と文学を自由に行き来できる数少ない哲学者で、本書の試み自体が画期的で有意義であることをまずはじめに強調しておこう⁴⁾。

小林が先に引用した佐古の言葉を意識しているかどうかは定かではないが（本書では少なくとも佐古の著作は引用・言及されていない）、間違いなく佐古の指摘する自我の問題こそ、「共鳴する」精神の

心臓部であろう。小林は序論において、二人の生涯を「近代との格闘」としながら、次のように述べている。

「漱石も西田も早くから日本におけるこうした〔輸入品を追いかけて何一つ実を結ばない思想の空洞化という〕思想の危機を予想し、危惧していた。危惧の対象は主として消化されない思想や理念とその結末であるが、彼らの危惧はそういう日本側の表面的な受容だけに向けられてはいなかった。受容される当の西洋近代自体が抱える問題をもいち早く見抜いていたからである」。

しかし小林は、安易にこれを「近代的自我の乗り越え」とはしない。小林によれば、漱石と西田の素晴らしいところは、これを「単なる知識上の概念操作ではなく、実際に自分の身において」行ったところにある。西田は「鈍牛」に譬えられていたそうだが、面白いことに、晩年の漱石も「牛になる」ことの重要性を訴えていた⁹⁾。二人の人生が今も人の心を打つのは、「近代の格闘」を、牛のような粘り強さをもって体験した実績があるからなのかもしれない。

「共鳴する」精神を持つ漱石と西田だが、二人は、共通の知り合いがいたとか、帝国大学で同じドイツ語の授業を受けていたとか、「せいぜいニアミス」があったくらいで、「直接的な親交を結ぶことはなかった」。しかし二人は驚くほど「よく似た体験」をしている。例えば二人とも「没落する旧家」に生まれ、父親との関係がよくない。漱石は、東京の年老いた両親の末っ子として生まれ、生後間もなく里子に出され、その後生家に戻ったが、実父には歓迎されなかった。西田は金沢の富農の長男として生まれたが、家の没落に伴い、父との関係が不和になり、父親の遺言状に「不孝の長男幾多郎」と書かれた上、死後も親戚ともども「相崇り候」とまで書かれている。こうした「模範としての父親像の欠損」は、「取り組むべき父親がなくて超自我が成立しにく」く、「自己制御が弱くなる」。そして「弱い自己抑制は、逆に自己主張や反発心と合流し」、「権威にとらわれない自由独立の精神」を生みやすいという。小林によれば、漱石と西田はまさにその典型で、「人並み以上の反骨精神や独立心をもっていた」。西田は旧制四高を退学、漱石は大学予備門落第、そして、1907年には帝国大学のポストを去って「筆一本」の道を選び、1911年には有名な「博士号拒否事件」まで起こしている。

理想の父親像の欠落した漱石と西田だったが、面白いことに、二人はそれぞれ「漱石山房」や「京都学派」というように「非血縁的な疑似家族共同体」を弟子たちと作り上げ、「その中心にいて特別な『父性』を発揮した」。彼らは単に「専門知識を教示しただけでなく、目をかけ、可愛がり、叱り、励まし、面倒を見、相談に乗」ってこまめに愛情を表現した。このような濃密な関係が出来上がる背景として、小林は、弟子たちがしばしば地方出身のエリートであることをあげている。彼らが「中央にやってきて最初にやるのは、ただ単に勉強に励むことではなく、むしろ自分の目標とする理想人物を見つめることである」。弟子の中には、漱石のような歩き方をしたり、笑い方をしたりする者もあったという。漱石の（一部の）弟子たちの悲劇は、「『父殺し』が貫徹できず」師の模倣で終わってしまったことである。そしてこの傾向は、「師との一体化の強い京都学派」にとっては一層強く、小林はこれが京都学派衰退の原因だと考えている。

小林は、西田と漱石の共通点としては他にも、「戦争時代のメンタリティ」、漢学の教養や、愛する我が子をなくしていること、岩波書店との深い関わり——いうまでもなく創業者の岩波茂雄は漱石の門下生で、漱石も西田も著作を岩波書店から出版している——などに触れているが、より本質的なものは、参禅体験そして「公案の問い」であろう。

西田と禅の関わりは深いが、実家は「加賀ではごく一般的な浄土真宗」だったので、成長過程では禅に対して知的興味をもっていたくらいだったという。禅への本格的な取り組みが始まったのは、1891年11月、帝大選科生のとき、鎌倉円覚寺の今北洪川（1816-1892）の下で修行を始めていた同郷の友人、鈴木大拙（1870-1966）を訪れた際だという。それ以後、西田の日記には毎日禅を日課に入れていることが記されているが、「どんなことでも一度やり始めると、それに集中する西田の性格がよく出ている」という。禅の修行において西田はいくつもの公案を授かったが、もっとも真剣に取り組んだのは「無字の公案」だという。そして西田は1891年に洪川から公案を与えられて以来12年目で「無字の公案」を透過する。が、西田はこれに満足せず、無というものを「自分の携わる哲学という分野で考えて」いこうとする。そして小林曰く、無を「もっとも直接的に」論じているのは、「場所」という論文である。西田は言う。

「我々が有るというものを認めるには、無いというものに対して認めるのである。併し有るというものに対して認められた無いというものは、なお対立的有である。真の無はかかる有と無とを含むものでなければならぬ。かかる有無の成立する場所でなければならぬ。有を否定し有に対立する無が真の無ではなく、真の無は有の背景を成すものでなければならぬ」⁶⁾。

その後の「純粹経験」、「絶対的自己矛盾同一」なども「すべて同じ問題を発展的に考えようとしたもの」で、「無」の問題は「生涯にわたって西田の思考を支配した」のである。

一方の漱石と禅との出会いも西田と同じころ、大学時代の交友関係がもとで始まっている。その友人とは米山保三郎（1869-1897）と菅虎雄（1864-1943）のことであるが、面白いことに二人は鈴木大拙と同じ今北洪川の下で、鎌倉円覚寺で禅の修行をしていた。漱石は菅の勧めで1894年末から正月明けにかけて円覚寺に参禅する。洪川はすでに亡くなっていたから、「西田や大拙とはすれちがいつななった」訳だが、このとき漱石に与えられた公案というのが、「父母未生以前本来の面目」というものであった。漱石がこの体験を『門』で再現していることは周知の事実だが、主人公の宗助と同様、漱石も見性の門の中には入れずに終わる⁷⁾。『門』では主人公が、透過できなかった理由として、自分がこれまで「分別を便に生きて来た」ことをあげ、「始から取捨も商量も入れない愚なもの、一徹一図」の必要性を悟るが、勿論反省だけでは終わらない⁸⁾。「彼は門を通る人ではなかった。又門を通らないで済む人でもなかった」という言葉の通り、「公案の問い」は宗助同様、漱石にも未来に取り組むべき課題として残されたのである⁹⁾。

といっても漱石の参禅体験はこのときのみで、禅寺でさらなる修行を積んだというわけではない。禅の修行という点において、漱石は、「はるかに本格的」だった西田に及ばなかった。だがそれは、禅の課題に対する情熱の欠如を意味しない。事実、西田と同様、漱石は自分の分野において（つまり

小説を書くことによって)、「この公案と格闘した」のである。この格闘をおそらくもっともよく表しているのが、「自分とは何か」という問いに苦しんでいる『行人』の主人公一郎である。「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしかない」という一郎が、死ぬこともできず、宗教にもものめりこめず、半狂乱ではあるが、やはり狂人にもなりきれずにいる¹⁰⁾。そんな彼が最後に希望を見出すのは、「見性(悟り)ができたかどうかという宗教的関心とは別次元」の「確かな自分を得るため」の禅的な境地である。その境地とはどういうものか、本書では触れられていないが、『行人』の中にヒントがある。神や仏など「自分以外に権威のあるものを建立するのが嫌い」で、かといって「ニイチェのような自我」にも賛同しない一郎は、自分が神で「絶対」だという。この「絶対」というものを一郎の親友のHが説明している場面がある。

「兄さん〔一郎〕の絶対といふのは、(略)自分でその境地に入って親しく経験する事の出来る判切した心理的のものだったのです。兄さんは純粹に心の落ち付きを得た人は、求めなくても自然にこの境地に入れるべきだと云ひます。一度この境界に入れば、天地も万有も、凡ての対象といふものが悉くなくなって、ただ自分丈が存在するのだと云ひます。さうしてその時の自分は有るともないとも片の付かないものだと云ひます」¹¹⁾。

一郎の「自分は有るともないとも片の付かない」境地と西田の「真の無」との共通性は明らかである。漱石も西田も、人間というものが、「小なる自己をもって自己となす時には苦痛多く、自己が大きくなり客観的自然と一致するに従って幸福となるのである」ということを知っていた¹²⁾。そして「自分は有るともないとも片の付かない」境地に達した時、本当の自己、「本来の面目」を回復することができるということも知っていたのだ。このように二人は、「見性(悟り)ができたかどうかという宗教的関心」からは離れたが、禅的な課題を生涯にわたって考え続けたのである。

本書は文章的にも読みやすく、さらりと読める一冊だが、これは漱石と西田の共通点が、内面的なものよりも外面的な事柄に多く頁が割かれていることと関係するだろう。外面的な事柄がそれなりに興味深いことは事実だが、「共鳴する明治の精神」と副題にもあるように、もっと思想的な共通点に焦点をあてて、二人の「近代との格闘」を掘り下げてほしいところであった。本書で小林は、漱石と西田が、それぞれの長い著述活動の中で、いかに「内省」を描くことに奮闘したかについて論じているが、二人の大人物の「内省」を同時に描くことはやはり容易ではなかったのだろう。もっとも小林には漱石と西田それぞれに関する優れた単著が有り、思想についてはそこで論じ尽くしたという思いがあったのかもしれない。いずれにせよ、開拓者の大仕事を批判するのはあまりにも易しい。我々が成すべきことは、開拓された貴重な土地を耕して豊かにすることである。近代の歪みがいろいろな形で表面化している現在、漱石と西田の「近代との格闘」は、現代人にとって何らかの道標になるだろう。これからこの二人の思想的比較研究が盛んになることを願ってやまない。

注

- 1) 佐古純一郎『夏目漱石の文学』朝文社、1990年2月、25頁。言うまでもなく佐古のこの言葉は、「則天去私」の説明として知られる漱石の「自分が自分がという所謂小我の私を去って、もっと大きな言わば普遍的な大我の命ずるままに自分をまかせる」という言葉に基づいたものである。松岡譲『ああ漱石山房』朝日新聞社、1967年5月、150頁。

- 2) 数少ない例外として、萩原桂子「夏目漱石と西田幾多郎における東洋と西洋——『行人』と『善の研究』」『九州女子大学紀要』第43巻第1号、2006年9月、63-72頁などがある。
- 3) 小林秀雄「学者と官僚」『文芸春秋』、1939年11月初出、小林秀雄『小林秀雄全集 第六巻』新潮社、2001年7月、553-562頁にて所収。引用は560頁。
- 4) 小林敏明『西田幾多郎の憂鬱』岩波書店、2003年5月。小林敏明『西田哲学を開く—〈永遠の今〉をめぐって』岩波書店、2013年5月、小林敏明『憂鬱なる漱石』せりか書房、2016年10月。
- 5) 小林『西田幾多郎の憂鬱』、199頁。また漱石は芥川竜之介と久米正雄宛の書簡の中で牛になることの必要性を繰り返し述べている。例えば大正5年8月21日付の書簡では、「しかし無暗にあせっては不可ません。ただ牛のように凶々しく進んでいくのが必要です」と述べている（夏目漱石『漱石全集 第二十四巻』岩波書店、1997年2月、554-556頁。引用は555-556頁）。また、同年8月24日付け書簡では、「牛になることはどうしても必要です。われわれはとかく馬になりたがるが、牛にはなかなか切れないです」と述べている（夏目『漱石全集 第二十四巻』、558-562頁。引用は561頁）。
- 6) 西田幾多郎「場所」西田幾多郎（上田閑照編）『西田幾多郎哲学論集 I』岩波文庫、1926/1987年11月、67-151頁。引用部分は、77頁。
- 7) 『門』では、主人公宗助が、老師から「父母未生以前本来の面目は何だか、それを一つ考えてみたら善かろう」と言われる場面がある。夏目漱石『門』夏目漱石『漱石全集 第六巻』岩波書店、1910/1994年5月、345-610頁所収。引用は576頁。
- 8) 夏目『門』598、599頁。
- 9) 夏目『門』599頁。
- 10) 夏目漱石『行人』夏目漱石『漱石全集 第八巻』岩波書店、1912-13/1994年7月、i-448頁所収。引用は412頁。
- 11) 夏目『行人』427頁。
- 12) 西田幾多郎『善の研究』、岩波文庫、1911/1950年1月、119頁。

(立命館アジア太平洋大学非常勤講師)